ふるさと宿南

★　第１２４号　★
発行　令和　３　年　１１月
宿南地区自治協議会
TEL・fax:662-3400
Email：kyosyukunami@maia.eonet.ne.jp

紙芝居披露

１０月２２日（金）小学校のオープンスクールで学びの里プロジェクトの皆さんが制作された「草庵先生と北垣国道」の紙芝居が青谿書院でお披露目されました。低学年の児童には少々難しかった様ですが、中・高学年の児童は草庵先生と北垣国道のことが理解できたのではないでしょうか。

秋まつりの様子

１０月１６日（土）１７日コロナ禍ではありましたが各地区で行われました。あいにくの雨でしたので参拝される方も少なかったように思われました。来年は、以前のような秋祭りが開催できれば良いのにと思われます。

神輿練り歩き

１０月２１日（木）出発のころには雨も上がり、こども園と宿南小学校１・２年生で宿南地区内を神輿で練り歩きました。地区の方の声援をいただきながら小学校～こども園～ふれあい倶楽部～川西区内～小学校を「ヤッサヤレ」の掛け声をかけながら神輿を担いで歩きました。

宿南こども園　作品展

１０月２５日～１１月５日まで
ふれあい倶楽部で作品展を開催しました。
超最大級　恐竜**“イモザウルス”**がふれあい倶楽部に現れました。
　さて、次はどこに現れるのでしょうか。

身近で見られる植物　⑥

サザンカ〈ツバキ科〉

冬の季語にも使われ、童謡「たき火」の歌詞にも出てくるように、寒い時期に花の咲く木です。一年中緑の葉を付ける常緑樹ですから、本来暖かい地方に自生している木です。このあたりで見られるのは園芸種で植えられたもので、赤、白、ピンクなどの種類が見られます。チャ、ツバキと同じ仲間なので、葉はお茶としても利用できることから山茶と言われ、山茶花（サンサカ）が訛り、サザンカと言うようになったそうです。

4 月から 10 月の温かい時期に虫食いの葉が見られる時はチャドクガの幼虫が着いている可能性があるので気を付けましょう。花言葉は「困難に打ち克つ」ですが、色によって違うようですので、一度調べてみてください。

冬バージョンへ

花水木の会の役員の皆さんで花壇の花を色とりどりのパンジーとビオラに植え替えていただきました。お越しいただいた時には、是非ご覧下さい。

季節外れのサクラが自治協前庭の木２本に花をつけました。花数は少ないですが、サクラの花を見るとなぜか心は「春気分」です。
来春のサクラの季節にこれらの木にも花をつけてくれるらしいですが、花数は少ないようです。

お知らせ

１１月１５日～１７日　トライやるウィーク
（自治協　４名受け入れ）
１１月２１日　　小学校学習発表会

草庵先生紹介

日記　３３

草庵が林良斎に宛てた手紙。巻紙を伸ばせば１０ｍは越す。現在の４００字詰め原稿用紙に書き写せば２０枚程。この手紙は良斎の死後に届いた。

濱篤さん作

いつもは妻に優しい言葉をかけている池田草庵。だが、この時は思わず、「あっちに行ってくれ。これはあなたの知るところのことではない」（「祭林良斎文」から）と大声で言った。友人の一人、讃岐（現・香川県）の林良斎の亡くなった知らせを、手紙で知ったときのことだ。その日の日記。「讃岐の多度津から手紙が届いた。林良斎が先月の４日に亡くなった。と知らせてきた。良斎の子、求馬の手紙もあった。激しく慟哭（どうこく）する」（嘉永２〈１８４９〉年６月１４日）

良斎の亡くなったことを知り、草庵は声をあげて泣いた。その声を聞いて妻、久さんが心配して部屋に入ってきたのだ。草庵にしてはめずらしく大声を出してしまった。「妻は、どういうことかはわかっているだろう。この広い宇宙で私の痛苦を知る者があるだろうか」と、「祭林良斎文」に書いている。それほど良斎の死は、草庵にとっては衝撃的なことだった。１カ月ほど前には、良斎たち友人の手紙をまとめて往復書簡集「鳴鶴相和集」を作って良斎にも送ったばかりだった。また、良斎の亡くなったのは５月４日だが、草庵は４月３０日付で良斎宛てに長い手紙を出していた。

草庵が林良斎と実際に出会ったのは１度だけである。立誠舎（養父市八鹿町）にいた時代、池田盛之助ら数人の門人らと師や友を訪ねて四国、山陽などを旅したときだった。良斎は多度津藩の家老職を務めた人で、草庵より６歳ほど年上の儒学者でもあった。他国の者とは簡単には面会を許さない藩だったが、仲介をする人があり面会がかなった。面会は２時間ほどだったが、草庵が「千古（＝永遠）の心友に出会った」と言うほど意義のあるものだった。これ以後２人は、互いに尊敬と信頼で結ばれていった。

出会ってから３年後には、草庵はおいの池田盛之助を良斎の元に送り、１カ月間学ばせた。良斎の死後、良斎の子の林求馬は青谿書院に来て学んだ。草庵は、良斎の生前の著作などを数カ月かけて書き写して「自明軒遺稿」と題してまとめた。自明軒とは良斎の号だ。千古の心友であった良斎は、いつまでも草庵の中で生き続けた。

池田草庵先生に学ぶ会